

生徒・教師の情報活用力を学校外部が支援するコンソーシアム「つどい」

ー ICTに係わる共同事業体としての実践ー

埼玉県越谷市立大袋中学校 校長 大西 久雄

onishi-h@silver.plala.or.jp

キーワード：学校支援、コンソーシアム構想、地域連携、win-winの関係、iPad、SNS、プレゼン

1. はじめに

今、学校では対応することが難しい多様な今日的課題や新たな取組が溢れている。そこで、学校外部の力を借りて課題等に取り組むことが普通となってきたが、本校ではこの学校支援の在り方に変化を加えている。それが、大袋中コンソーシアム構想であり、通称「つどい」と称している。

2. コンソーシアム「つどい」とは

(1) 学校支援の特化的チカラの集合

本校は、狭義の学区地域のみならず「学校の外はみな地域」の発想で、いただける支援は大いに受け入れる。そして、それは個人、団体問わず、大学、企業、第三者機関等多岐に渡る。企業間、大学間では共通の目標の下にコンソーシアムという共同事業体を組み、様々な事業を展開している。「生徒により豊かな教育を」という共通目標で、学校であってもコンソーシアムを組めるだろうという発想である。それぞれが得意な分野で学校支援を行い、それを集合させることで生徒により豊かな教育を展開したいという構想である。

(2) ボランティアではなく win-win の関係で

とかく学校支援というと、学校側が頭を下げてお願いしたボランティア的要素が強い。大袋中コンソーシアムは win-win の関係である。共に得るものがある係わり方を旨とし、学校と PTA で事務局を構成し、支援いただける個人、団体等を取りまとめている。その数は、現在優に 30 を超えている。支援活動としては、「授業等の工夫・改善サポート」「安心・安全な環境づくり・健全育成」「コミュニケーション・人間関係調整力の向上」「よさの積極的・多様な情報発信」の 4 つのカテゴリーに分類されるが、ここでは、特に情報活用力向上の 4 つの連携実践を紹介したい。

3. 4 つの情報活用能力育成実践

3. 1 授業における ICT 活用で学びを豊かにする

近隣の文教大学と連携し、iPad 10 台を各授業で自由に活用できるようにした。生徒間相互啓発を誘発するためにあえて 1 人 1 台ではなく、班で 1 台活用する方法を採っている。各教科で活用するが、大学教員、ICT 支援員として来校する学生が活用方法や教材をサポートし、教師の抵抗を下げる働きを試みる。そのことで、本校では ICT 活用率は市内 1 位である。

一方、大学側はその実践成果や課題を研究材料とし、学生にとっては実践研究の場の拡大という利を得る。



写真1 iPadで作業



写真2 素材で実践提供

また、企業や第三者機関が提供する教材や素材を本校独自にアレンジし、その実践事例を提供することが、双方の win-win となるなど具体的な成果も出ている。

3. 2 ICTで創造性に富んだ自己表現を行う

理解を促進する ICT 活用から、ICT で生徒が自己表現を行うための実践機会をコンソーシアムにより提供できた。NHK の動画サイト制作部との連携によりその素材を活用した。2 年国語古典「枕草子」の発展授業である。NHK 提供の四季折々のデジタル動画を



写真3 自作枕草子を発表

を入れた iPad を使い、各班で現代版枕草子を創作するのである。各班のオリジナル版を大型 TV で発表する実践である。NHK テレビが収録し、放映された。また、同動画サイトにも実践事例として紹介されている。

3. 3 ネット等を正しく使う技術や知識を得る

ケータイ・ネットに係わる問題は、各学校でも今日的な課題である。本校でも 6 割の生徒がケータイを所持し、今流行の SNS を利用している。単に禁止するだけでなく正しく使う技術や知識を得ることが、未来を生きる生徒には必要と考え、大手 SNS 3 社とコンソーシアムを組んでいる。生徒総会で本部役員が、正しく使うための提言を行うとともに、SNS 企業がその場に参加し、SNS やネットの使い方のアドバイスを送る。また、学校朝会では別の SNS 企業に参加し、



写真4 SNS企業が参加

校長講話を共にする。さらに、PTA 主催のバザーでは、SNS 企業が出店し、生徒・保護者に ICT を駆使しながら正しい使い方の啓発を行い、参加した人々から好評を得た。

また、財団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構との連携では、同機構が制作した教材を使い、モデル授業を行うと共に、現在も連携を継続している。

3. 4 学んだ成果をICTにより公表・共有する

コンソーシアム「つどい」の連携は地元の地域こそその成果を発揮する。先の文教大学と共に地元幼稚園と連携し、生徒の幼稚園実習にICTを導入した。生徒は家庭科の授業で各自のパペット人形を制作する。その人形を使って、生徒は班毎に幼稚園児を楽しませる人形劇を創作するのが課題である。そこに文教大学学生の力で、デジタル背景を作成して人形劇に厚みを加える。中学生と大学生の創造性がコラボレートし、



写真5 幼稚園での発表

園児の反応は予想以上であった。自分たちの実践発表が反響を呼び、成果を得たことで、生徒たちは大きな自信を持つこととなった。

また、文教大学教員、学生との連携で、「パソコンによるプレゼン力育成講座」を実施している。部活動引退後の3年生を対象に希望制で、土曜日の午前4回の講座である。参加生徒は、大学の先生や学生からプレゼンテーションの仕方、プレゼンテーションソフトを使つての資料づくり、実際に人を惹き付けるプレゼンの仕方等をほぼマンツーマンで学ぶ。講座を受講した生徒たちは、PCを駆使してノー原稿で10分程度のスティーブ・ジョブズばりのプレゼンを自信持って



写真6 プレゼン講座



写真7 学生と共に作成



写真8 プレゼン発表会

堂々と披露する。今年度は、コンソーシアムを組む地元公民館、NPO法人との協賛で地元の市民会館を借りて、保護者や近隣の方々を招き、発表会を実施した。この生徒たちのプレゼンは、参加者を大いに驚かす程の成果を得ることとなった。

さらに、このプレゼン発表会では、SNSをテーマした生徒もあり、ここでもコンソーシアムを組む大手SNS3社が協力し、生徒のプレゼン作成から発表会まで生徒と企業が一体となった連携を行うことができた。

4. 本取組の成果と今後の展望

学校独自で行えることには限りがある。特に今日の課題や要請の中で、ICTに係わる取組がなかなか学校現場で浸透、定着しないのは、ハード面もさることながら使う教師のサポートが不十分であることも大きな要因である。一部のICTに詳しい教師に頼っている時代は終わったと悟るべきであろう。多くの教師が楽しく、容易にICTを使える体制、仕組みづくりをとの思いから当初大袋中コンソーシアム「つどい」はスタートした。今では、ICT以外にも様々な共同事業はあるが、本稿で紹介した実践を経ての成果をまとめた。

(1) 生徒の思考・判断・表現の場が拡大する

各授業等において生徒たちの手元に届く機器や教材・素材を確保でき、集団の相互啓発をより可能にし、生徒間のコミュニケーションの機会が増した。このことにより生徒の表現したいという欲求が高まり、表現力が増すことにつながった。さらに、教師の予想を超える生徒の反応やパフォーマンスを得ることで、教師自身の刮目ともなった。自分の授業改善の視点を得、意欲を得ることとなったと言えよう。まさしく生徒と共に教師も成長することができた。

(2) 学校教育の固定観念の転換につながる

学校は、教師はとかく良くも悪くもコンサバティブである。学校外部とコンソーシアムを組み、特にICTに係わる連携、共同事業を展開してみると新たな視点が見えてくる。特に、3. 11以後の学校の危機管理、情報の発信体制は大きく変わらなければならない。大袋中は、コンソーシアムを組むことによりツイッター、ホームページでの多角的な情報発信が可能となっているが、それ以上にこれまでの学校現場におけるあたりまえ、常識と考えられているもののパラダイム転換が大きな成果であると実感している。

(3) ICT連携こそ容易であるの確信を得る

ICTは間違いなく学校外部の方が詳しいものが多い。学校からの働きかけで連携や協力を惜しまない方々が多いのも事実であることを知った。連携が連携を呼び、積極的な情報発信や口コミが連携を強くすることを知り得たのも大きな成果である。

(4) 学校に自信と誇りが高まる

ICTを中心としたコンソーシアムにより、保護者・地域に学校情報を広く、多様に、数多く配信できるようになった。このことが、生徒をはじめ教職員、保護者、地域の自信と誇りを高揚することにつながっている。

最後に、この実践を幅広く共有し合える仕組みづくりが今後の課題であり、展望でもあると考えている。